

令和元年度第2回丹波市総合教育会議 会議録

令和元年11月20日（水）午前9時00分～午前10時15分

丹波市役所山南支所3階 教育委員会室

出席者	市長	谷口	進一
	副市長	鬼頭	哲也
	教育長	岸田	隆博
	教育長職務代理者	深田	俊郎
	教育委員	中村	美穂
	教育委員	横山	真弓
	教育委員	出町	慎
	企画総務部長	村上	佳邦
	政策担当部長	近藤	紀子
	教育部長	藤原	泰志
	教育部次長兼学校教育課長	足立	正徳
	教育総務課長	足立	勲
	学事課長	前川	孝之
	文化財課長兼美術館副館長	長奥	喜和
	子育て支援課	上田	貴子
	教育総務課庶務係長	芦田	将司
	総務課長	田口	健吾
	総務課総務係長	田口	頼希
	総務課総務係	畑中	直之

傍聴者 0名

1 開会

○村上部長 改めましておはようございます。定刻9時になりましたので、令和元年度第2回目の丹波市総合教育会議を始めさせていただきます。本日の会議でございますが、それぞれ会議が後にあるようでございますので、10時15分までには終了させていただきたいと思っております。大変短時間で申し訳ございませんが、よろしくお願いいたします。

それでは次第に基づきまして、進めたいと思っております。2番目の協議事項でございます。早速でございますけれども、市長からごあいさつも兼ねて、本日のテーマ、「教職員の働き方改革について」、市長から約10分間よろしくお願いいたします。

2 協議事項

○谷口市長 みなさんおはようございます。あいさつ、あるいは協議事項というよりは、少し私の教育に関する雑感みたいなこととお話させていただきたいと思っております。

今回、資料もお配りいたしました。手書きの「総合教育会議」というペーパーではありますが、私は再々、シンポジウムや講演会のようなものに呼んでいただく機会があるわけですが、そのときに何かひとつでも残るものがあればというようなことでメモをするわけではありますが、ここ一ヶ月ほどの間でいろいろ参考になったことを書かせてもらいました。「対立する二つの思い」と書きましたが、やはり、これからの教育現場というのは一層、混迷の度を深めていくのではないかということが大前提にあります。ひとつは、先月、「鳥の目、虫の目、魚の目」というのを聞きまして、一番この中で大切なのが「魚の目」、いぼ、たこ、魚（うお）の目ではなくて魚（さかな）の目のことです。魚の目というのは、必ず潮の目を読む、先々どのように潮が流れていくかということを考えながら自分の動きを考えていく、すなわち何が言いたいかということ、これからAIとかsociety5.0など、まさに生き馬の目を抜く、そんな世界がこれからずっと益々加速していくというふうに思います。そういうことに果たして子どもたち、あるいは先生方が追随していけるのか、あるいはしていかなければいけないのか、そういうことについて私なりに非常に疑問を抱くわけです。

今日の神戸新聞に、たまたま見られた方がいらっしゃるかもしれませんが、陰山メソッドで有名な陰山先生の記事が載っていました。陰山先生は、「学力向上」、それをとにかく基本目標に掲げておられます。100マス計算とかで大変有名な先生でありますけど、はっきり言って、学力向上だけが学校の目的かといういろいろな意見がある中で、陰山先生は、教員はとにかく授業に力を入れて欲しい、子どもたちのしつけなどは親や地域の役割であるとはっきり言い切っておられるんですね。これはなかなかそういうふうに割り切れるかどうかという問題もありますが、この先生の場合は強い信念を持っておられて、それが

この人なりの生き方だということで高い評価を得られているということです。その中で私のペーパーの下の方に「教育者の立場からの二つの意見」と書きましたけども、私はむしろなるほどと感じたわけですが、「①文化芸術シンポジウム」というのがありまして、ミライズそらの山口洋子さんの発言でした。いわゆる、「非認知能力」、私はこの言葉を初めて聞きました。知らなかったんです。要するに、「認知能力」というと、よく勉強ができる、学力が高い、単純に言うとそういったことになりませんが、「非認知能力」は学力だけでは測れない能力、ですから、忍耐力やコミュニケーション力とか、あるいは空気を読む力とか、いわゆる 20 年程前に「IQ より EQ」という言葉がよく流行りましたけど、心の知能指数、そっちのほうを育てることが非常に大切で、その能力というのは 4 歳、5 歳ではもう遅い、2 歳、3 歳ぐらいまでに教え込まないと将来役に立たない、というような話をされたらと、こう思っています。私は確かに、非認知能力、EQ というのが大変大事だということが前から十分分かっていました。その下に、「②ひょうご消防のつどい」の中で、大阪市立大学の先生が、まさに IQ より EQ の話をされました。将来的に社会のリーダーとなる人は必ずしも IQ が高い人ではない、知能指数が高い、高学歴、良い大学を出た人、そういうことにはならない、というような意味のことを言われたらと思っています。ある有名な人の本では「IQ の要素が 2 割、むしろ EQ の要素が 8 割」それが大切ではないかというような話を、これはだいぶ前に聞いた話ですが、それを思い出しました。

それともうひとつは上のほうの②についてで、私はいろんなところに訪れることがあるんですけど、久美浜湾の面したきれいなところに、如意寺というのがあるのをご存知の方も多いと思いますが、この前に行ってきたんですけども、山野草が大変きれいなところなんです。そこの友松さんというお坊さんがいらっしゃって、いろいろな教えをみなさんにわかりやすく本で説いている人なんですけども、その中で書いているのは、今、大変世の中がすごいスピードで回っていますけども、「追い求めて苦しむ、” 良いこと ” も ” やりすぎ ” に注意」というようなことが書かれています。その解釈として、今日、日々の暮らしを振り返ってみると、社会が成熟した分だけ幸福度が高まったかということ、必ずしもそうは言えない。得たはずの幸福以上に生活は実に多忙になっていて、心身が疲れている、希望もあるけども、不安のほうが大きく感じる、それは大人もそうですけども、たぶん子どももそうなんではないかと思っています。

例えばひとつの例として、私も先日、携帯電話が壊れました。何日間か携帯電話無しの日々をしてきたんですけど、こんな楽な生活があったのだと、携帯を持っていてのために、連絡がきたら返事をしないといけない、放っておくわけにはいかない、Facebook も見なければいけない、そのためにいかに自分の心が疲れているかということに気がついたわけなんです。かといって、時代に取り残されるわけにはいかない。どんどん科学技術が発展していく、技術と心の乖離

というのがどんどん大きくなる気がしているんですけど、だからといって、放っておくと、自分たちはもっとゆとりのある生活をしたらいではないかとは子どもには言えないですね。そのような疑問を私は大変思います。

面白かったのは、アインシュタインの話を書いているんですけども、実はアインシュタインは100年前の大正時代に日本に来たんですが、日本に滞在したときに、チップ代わりにベルボーイに渡したメモが最近オークションにかけて2億円で売れたという話があります。2年前のことです。そこには何が書いてあったかというのと、ドイツ語で「穏やかでつましい生活は、成功を追及するせいで常に浮き足立っているよりも、より多くの幸福をもたらす」ということが書いてあります。これはまるで私自身のことを言われているようで恥ずかしい気がしましたが、アインシュタインは、そのことに気がつきながらも、自分の発明が、どんどん先に行っている、真実を追求したいがために、結果的には原子爆弾という形に結びついたわけで、自分自身が言っていることとしていることがちょっと違うなと思いつつもそういう方向に進んでいったということかと、こういうふうには思っています。

もう一枚、ページの裏側には、最近の日本経済新聞の記事で、教員の残業を減らすということに道筋を示すということが書いてありまして、法案の審議が今進んでいて、変形時間労働制度が導入されようとしているというようなことが書かれています。小学校では月平均で59時間、中学校で80時間、こんなに残業がある、特に中学校の場合は部活に従事する時間が非常に長いようです。先ほど言ったように、世の中は私たちでは想像ができないようなスピードでこれから進んでいくと思います。そうなったときに、先生方の仕事というのは増えこそはすれ、減ることは絶対にはないと思いますし、そういうふうな先生自身の余裕の無さがひいては子どもたちに伝わってしまう、それは私自身も十分に反省しなければならないと思っています。このことはアインシュタインの言葉に通じるなと思っています。

今思うとちょうど60年近く前ですけども、父親と稲刈りをしながら、昭和35、6年ごろだったと思うんですけど、「進一よ、東京オリンピックまでにはテレビ買いたいな」と言ったのを覚えています。結局、科学技術は全然進んでいなかったけれども、あの頃の生活のほうがはるかに心が豊かだったというようなことを思うわけです。そういう意味で、これからの子どもの未来、あるいは教育の方向性は大変に不透明ですが、科学技術と心のアンバランス、そういった中で、教職員の働き方改革も含めて教育という分野でのこれからの方向性を定めていく、世の中に流されないで心豊かな子どもを育てる、それは本当に難しいなと思っています。

結論でもなんでもありませんが、以上、私の雑感であります。

○村上部長 ありがとうございます。それでは教育委員の方々からお一人お一人

人にご意見を伺う前に、今日、資料を付けさせていただいております、教職員の働き方改革についての勤務実態とその取組みについて教育部の足立次長から説明をしていただきたいと思います。

- 足立次長 おはようございます。教育部次長兼学校教育課長の足立でございます、それでは少し時間をいただいて、今日、配付しております資料についてご説明させていただきたいと思います。資料を見ながらお聞きいただいたらと思います。

丹波市では平成30年3月に、「丹波市立学校業務改善計画」を策定し、教職員の働き方改革を推進しております。その中で、公務支援システムの導入であったり、定時退勤日の設置、「ノー部活デー」の実施により、教職員の意識改革と一定の成果を上げられています。資料にありますように、平成30年度と、令和元年度の教職員の4月から9月までの月別超過勤務人数や時間を比較したところ、80時間を超える超過勤務者が大幅に減少しております。特に小学校の月別超過勤務者につきましては、大きく減少しているのが見られると思っています。中学校につきましても、成果が上がっていますが、小学校ほど大きな成果は上げられておりません。今、市長のほうからもありましたように、やはり部活動の指導の影響が大きいと考えております。

また、これらの取組みと併せて、学校閉庁についても、丹波市広報及び教育委員会とPTA連名の協力依頼文を配付し、市民、保護者に周知を行い、理解と協力を求めています。以上のような働き方改革の推進により、業務改善が徐々に浸透してきていると考えております。しかしながら、教材研究、次の日にどんなことを教えるといったような、教える内容にあたっての準備や学級事務、部活動に追われ、超過勤務を重ねている教職員はまだまだ多い状況が資料からもお分かりいただけたと思います。

そういった状況におきまして、今後の取組みとして、教育委員会としましては、教職員を対象にした研修の見直しを行い、出張を減らしたり、あるいはオンライン会議システム「Zoom」、Web会議なんですけれども、そういったシステムを市内の学校に導入し、教育委員会で実施する、校長先生や先生方へのメールであったり、相談であったり、学校間の打ち合わせ等に活用し、効率化を図っています。また、令和2年度からは全学校に留守番電話を設置することにしてあります。さらに、80時間を超える超過勤務を行っている教職員には学校長が面談を行っておりますが、それに加え、市のほうでも行っておられます、産業医による健康診断と面接指導を行えるように体制の整備を進めております。

現在、県教委により、丹波市に1名、東小学校にスクールサポートスタッフという人材を配置させていただいております。業務負担軽減が高いことにより、市によるスクールサポートスタッフの配置も予算化しておるところでございます。

教育委員会としましては、こういった取組みを行っているんですけれども、

各学校におきましても、今まで当たり前のように実施してきた行事、あるいは教育課程の中でそれが本当に効果があるのか、必ずしも教師が行わなければならない業務なのかを話し合い、当然のように学校が行っていた業務の見直しを進めています。例えば、家庭訪問であったり、あるいは中学校では、中間テストの見直し、組み体操、文化祭、運動会の行事の内容の改革、あるいは先生が日々出しております、学級便りといった通信、こういったものについても本当に必要かどうかを考えながら改革を進めているところでございます。もちろん、中止するだけではなく、やり方を見直したものもたくさんあります。大切なことは手段が目的にならないように、なぜそれを実施するのかについて話し合うことで、より効果的な取組みになり業務改善につながっていくと考えております。

その他にも、現在進めております、コミュニティスクールの取組みを導入することによって、家庭や地域が当事者意識を持って子どもたちを育てていく意識の醸成も進めていく必要があります。今、市長のお話にもありましたように、子どもたちの基本的な生活習慣、あいさつであったり、朝食を食べるといったり、そういった基本的な生活習慣は本当であれば家庭の中でやっていくことであります。そういった当事者意識を持っていただきたいということも考えております。そういったことを話し合う場というのが、コミュニティスクールの学校における考え方であります。これまでは教育と名のつくものは、学校が行うものという意識が強くありました。その結果、学校の負担が増大し、教職員の業務が膨れ上がっております。教職員の働き方改革を進めることにより、結果的に子どもと向き合う時間が増えたり、教職員が自身の力量形成の時間を確保できたりすることが教育の質の向上につながると考えております。教職員の働き方改革の推進に、今日、参加いただいております皆様方から忌憚りの無いご意見をいただけたらと思っております。以上です。

- 村上部長 ありがとうございます。それではただいまのご報告も含めて、各教育委員様より、ご意見をいただきたいというふうに思っています。では、出町委員のから、お願いしたいと思います。
- 出町委員 教育委員の出町です。よろしく申し上げます。
私からは、視点としては、地域と学校の間、そういったところの視点で働き方改革について考えていることをお話させていただけたらと思っております。先日、11月の頭に、私が普段活動の拠点にしている青垣町で、「丹波八宿青垣の秋」というイベントがありました。16回目の開催になるんですけども、そこでは地元の商工会が中心になって運営しているんですが、地元の小学校や中学校、高校の子どもたちにも運営を協力いただいて、事業をしております。ボランティアとして中学校とか高校にご依頼に行くと、快く引き受けていただいたりとか、ボランティア以外にも、吹奏楽の演奏であったり様々な形で中学校、高校の協

力をいただいているんですけれども、その中でやはり、地域として見たときに、どうしても子どもたちのボランティアを受け入れるといったときに、ただ仕事を手伝ってもらおうというだけになってしまっていて、人手の足りないところを手伝ってもらったり、どちらかというと、子どもたちにどういったことを経験させてあげたらいいのかといった、そういった、学びにつなげるような視点で子どもたちと接するのがなかなか難しいというのが現状としてありまして、それが今回の我々の事業の中で見られた部分であります。

教育での働き方改革についてという話の中で、コミュニティスクールについて先ほど次長から話がありましたけれども、そこが担う役割が非常に大きいと思っています。地域側がやはり学校の運営に関わることが必要なんですけれども、関わるといってもどのように関わっていけばいいのかといったときに、ひとつボランティアをとったとしても、どうしたらいいのかがわからないというのが地域側の現状かなと、どういうふう子どもたちと接してあげればいいのかというのがわからないというのが現状としてあるのかなと思います。その中で、地域が学校に関わっていきたいんだけど、地域側がどういうふうに関わっていけばいいか、その部分を補完する手段として、地域側がいろいろと勉強しなければならないというか、いろんなノウハウを地域側が上げてかなければいけないのではないかと思います。

そういったところで、重要なところでは、市民プラザであったり、そういった学びの場というのが、重要な意味合いを持ってくるのかなと思います。この10月に市民プラザがスタートしていますけれども、その中で、地域づくり大学であったり、様々な市民講座がありますけれども、そのメニューのひとつとして、学校のこととか、学びの場を作っていく、そういったところで活躍していくような人材を育成していくとかですね、何か取り組みみたいところが、今後、入っていくと非常に良いのではないかと常々考えています。実際には学校の現場に関わっていきたいと思っている市民の方はたくさんおられると感じているんですけれども、なかなかそこにつながる手段がないというのが現状かなと思っています。

なので、市民プラザなどいろんな学びの場を設定すると同時に、学校教育の現場と、活躍したいと思っている市民の方をつないでいく仕組みも当然必要となってくると思っています。そこに関しては、まだ現状、コミュニティスクールがあるんですけれども、もっといろんな人材がいて、そういう人材がつながっていく仕組みというのがまだ弱いかなと思っています。それらに関しては教育委員会部局と市長部局と両方連携とりながら作っていかなければならない部分かなと考えています。

私自身も実際に地域に入りながら、やりがいを感じているんですけれども、実際は10年前のことを思うと、地域の方、市民の方の意識は高まっているような気がします。学校現場での意識ですね、何か関わりたいと思っていたけど、

どう関わっていいかわからないといったもやもやした感じがあると思いますので、そういったところをうまくいい方向につなげていく、働き方改革にもつなげていく動きを作れたらなということを感じております。以上でございます。

○村上部長 それでは次に中村委員、お願いいたします。

○中村委員 よろしく申し上げます。教育委員の中島です。先ほどの出町さんのお話と私すごく被っているんですけども、ちょっと違う視点から見ているかと思ってはいたんですけど、すごく似ているなと聞いていました。みなさん、今日は朝ごはんをたっぷり食べて元気いっぱいでしょうか。今日も疲れておられないでしょうか。

では、私からはこれを、お得意のこれなんですけれども（フリップボードを見せながら）、お話が下手なんで、絵を書きに来たんですけど、学校の先生と丹波市の子どもたちの一日を見ておられますと、やはり、朝起きた段階から下校までは同じ時間を過ごしています。先生方は子どもたちが帰った後に、翌日の準備をされたりとか、今日のまとめをされます。ここの緑の時間がすごく仕事の内容が多くて、家に早く帰らないといけないと思って、家に帰っても家の中で残っている作業をされたりして、夜遅くなって、寝るのが遅くなってしまって、朝も疲れた表情で起きてしまう。そして、そんな中で登校されている。月曜日から金曜日まで毎日そんな繰り返しで、そんな表情を子どもたちが見ておられますと、将来先生になりたいと思っていたのに、なんか、どうかなあとかいうふうに、先生になりたいと希望される子どもたちも多分減っていくのではないかなというふうに思っています。そして先生方も責任感が強い方が本当に多いので、人に頼らず、自分がやらなければというふうに思われる先生も多いのではないかなと思っています。

現在、コミュニティスクールが導入されているんですけども、そのコミュニティスクールの会議が夜になることが多いので、学校も地域も家庭も回数を重ねると、それがかえって負担になってきて、上手く機能しない可能性があります。

そこで、昼間に動けるコミュニティスクールのコーディネーターさんがキーパーソンになってくると思っています。仕事を持ちながらのコーディネーターというのは本当になかなかできませんので、勤務時間内に動ける丹波市の職員さんや、また新たにコーディネーターさんを数名募集していただいて、学校、地域、丹波市との橋渡しをしていただければ、この赤枠の中をちょっと拡大してみたんですけど、この赤枠の中で、コーディネーターさんに来ていただいて、先生方に空き時間を作ってもらって、今、教科書ではこういうことをしているんですけど、丹波のあの場所でとか、あれを使ってこんな授業ができないかなというふうに相談をしていただいて、コーディネーターさんは、それならあんな人がいる、こんな人がいる、というふうに、あんな授業ができるのではないかと

うふうと一緒に考えていただいて、教科書を基本に丹波版に変えたことで、ここでしかできないような授業もできますし、コーディネーターさんは取組みをコミュニティスクール便りのようなものを作っていただいて、それを地域の人に紹介をしていただいて、先生方自身、地域との関わりを負担なく持つことができ、子どもたちはみんな育てているんだと思いながら、安心して授業ができると思います。

市長さんも、周りの人の素晴らしい素敵なサポートで毎日を過ごされていると思います。先生方もそんな地域のサポートで安心して過ごして欲しいと思っています。これからの学校は昼間に動ける、橋渡し役のコーディネーターさんの存在が応援団を増やして、先生方の働き方改革につながるのではないかなと考えています。以上です。ありがとうございました。

○村上部長 ありがとうございました。それでは深田職務代理よろしくお願ひします。

○深田職務代理 おはようございます。教職員の働き方改革について、先ほどから話が出ていますように、なかなか難しい問題であります。どの切り口でお話しているのか、いただいた資料では教員のほうのですね、働く時間をベースに議論をとというようなことがありますし、市長から、この世の中、だんだんと先生の余裕が無くなっているのではないか、そんなご意見をいただきました。

そんな中でも、短い時間の中で何か切り口がないかなということを考えておったところではありますが、やはり、学校というのは子どもたちをどう育てていくかという、それを支えるのが先生、その先生がもし余裕がないとか、あるいは個人的には先生方も人間ですから、20代、30代、40代、50代、各ライフステージに伴って、それぞれの環境も変わりますし、思いも変わってきます。いろんな意欲も進んだり、減退したりしながら子どもたちを育てていく、それらをこれまで私は深く考えていたわけです。先生方はところによっては、子どもたちに意識が向いていかない方面がひょっとしたらあるのではないかと、それぞれのライフステージの中で、今、家庭のことだとか、意見がありましたが、特に女性教員の場合は、家庭を持つと、あるいは子どもを持つと、それぞれ縛られていく時間が多くなったりして、それぞれの年代でいろんな問題や課題が出てくるかと思います。それが子どもたちへの接し方に支障が出てくる、それでは困るんですけども、そういう側面もあるのではないかなというような気がします。

それはさておいて、そういう個々の細かい先生方の動きについては、教育委員会のほうで逐一見ながら、今いろんな改革をしている中で、先生方が動きやすいように、あるいは子どもたちと接し易いように考えていただければありがたいなと思います。そこでもうひとつは、外側からの学校の支援をすることで先生方の働き方が少し緩和できるのかなと思います。今、コミュニティスクー

ルの話が出ていました。中村委員のほうからは、コーディネーターというような話が出ていましたが、先だって、市の総合計画で委員として出席していただき、委員長の中野教授がおっしゃった言葉で、中野先生以外にも、北海道の方で丹波市に来ていただいたコミュニティスクールの実践者である近江正隆さんが Facebook で話しておられましたのが、関係人口というのを増やせとおっしゃっていました。中野先生もそうおっしゃっていました。関係人口、要は自治体ではいろんな中で、U ターン、I ターンを増やそうというようなこと、また、人口の自然増を考えろと言われていたんですけど、元々考えるべきは、今住んでいる方々の関係人口、個人の間接人口をですね、どんどんこう増やしていこうという、そんな考え方で理解していたんですけども、そういうことをすることによって、地域が活性化されていくと、学校への目の向き方、あるいは子どもたちの考え方というのは少しずつ変わっていくというのではないかなと最近思いつつあります。

子どもたちをとりまく先生というのは、今日、朝見ていましたら、私のところの学校の校区では多分、朝 7 時半ごろから立っておられると思うのですが、交通当番、立ち当番、これは中学もやっておられます。そういう朝の早くから出てくるというのは、子どもたちにはありがたいことですが、それは地域でできないかなと、先生方は職務の中で、子どもたちを指導する学校という環境の中でやっていく、地域でできることは地域でしていく、出町さんからは、地域が少し、接し方がわからないとかいうような意見がありましたが、少しずつ関係人口を増やすことによって、どんどん学校への関わりを、アプローチを強めていく、そうすることによって子どもたちへの関わりをどんどん増やしていく、コミュニティスクールも導入をしていますが、丹波市ならではのコミュニティスクールへ進んでいくのではないかと漠然と今、考えています。

ただ、具体的に関係人口について話をしないといけない、人と人との関わりを常に持っていかなければならない、そういう意識が大切かと思っておりますので、丹波市のみなさんには、そういうことを考えつつ、子どもたちをどう育てていくかというのを見てもらえば、少しは先生方の負担が減少して、教職員の働き方改革になるのではないかなというふうに、現時点では漠然とした思いを持っているところです。

細かいところではいろんな思いがあるんですけども、ざくっとしたところではそのようなところです。以上です。

- 村上部長 ありがとうございます。それでは横山委員、よろしくお願ひします。
- 横山委員 教育委員の横山です。働き方改革につきましては、今みなさんがご発言いただいた流れとほぼ同じです。今おっしゃっていただいたように、関係人口を増やせという言葉が非常に重要なことだと思います。

コーディネーターですとか、今現在、サポートスタッフという配置をされているということで、やはり、この資料を見させていただいた中で、やはり、その他事務処理というところで超過勤務の理由をあげていらっしゃる先生が非常に多いという現実がありますので、やはり、働き方改革をする以上、仕事を減らすということは絶対的に必要で、これは私どもも、兵庫県や、兵庫県立大学に所属しておりますが、この事務が減らないということが非常に大きな問題と感じておりました、この事務を減らす、減らすことができないのであれば、サポートスタッフとかの配置というのは、非常に事務に長けた方を入れていただくということがあるとそれはそれで負担がかなり減るのではないかなと感じています。地域行事については、今は割合は少ないようですが、先生方としてはコミュニティスクールでそういった負担が増えるのではないかなという不安が恐らくあるのではないかなと思いますので、上手に取組みを進めていくことが重要ではないかなと感じております。

それから、私の立場から少しお話をさせていただきますが、昨日、春日町の野瀬に入って鹿と猪の調査を行ってきました。熊が出ている地域ですけれど、私が入りますと、動物たちは逃げていってくださり、私に近寄ってくることはありません。これはやはり動物たちは人間が怖いのです、特に私は怖いと思われているようでして、うちの森林動物研究センターのスタッフが行くと、普通は一目散に逃げてくれるんですね。ところがですね、今現在、何が起きているかということ、動物たちが集落に押し寄せているという状況があるんですね。これはいったいどういうことなのかということ、こういったことはいろいろな場面でお話をさせていただいているんですけども、青垣町にあります、いきものふれあいの里であるときお話したときに、学校関係者にたくさん参加していただいていたんですが、なぜ、野生動物が里に出てくるのかという理由について3つの仮定をあげて手を挙げて答えていただいたんですが、ほぼほぼ学校教育関係者は間違っているんですね。あとで先生方に聞くと、間違っ理解して間違ったことを教えておりましたというような状況で、残念ながら100年前の状況をみなさん教育されているんです。明治時代、100年前は確かにそうでしたが、今状況が全く異なっているということを知らないという状況でした。

どうして丹波の自然はこんなに豊かなのに、動物たちが集落に押し寄せてくるのかというようなことを知っていただくということは非常に重要なことと感じているんですけども、そういったことを学ぶ機会も先生方は無いという状況です。ましてや、子どもたちが知るよしもないというような状況になっております。やはり、丹波の魅力は何かな、丹波で子育てをしたいなと思っていただく、丹波に移り住んで生きたい、そういったことをこれから恐らく発信していかなければいけないと思いますので、是非ですね、今回整備されております、水分かれ公園ミュージアム、あそこがひとつのそういった新たな自然環境教育の拠点、それから、この環境の中で暮らしていきたいなとか、それからこうい

ったところで子育てしていきたいな、こういった教育を受けたいなというような拠点になると感じておりますので、是非、この水分かれで魅力あるスタッフを配置し、あそこに行ったら、こんなスタッフがいて、こんなことを教えてくれて、こんなことが体験できる。自分でもやってみようというような、そういった教育の拠点、環境教育の拠点になるような、ちょっと一味、二味違う、今までにない、博物館的な機能を、そういったことを入れていただけたら良いかなと感じております。もちろん、わたしどものほうでも全力でサポートして、こんなに小さいけれど、日本一のミュージアムといわれるようなものにしていただく。そこにはやはり学校教育を支える人材、そういった方がどうしても必要だと感じております。

この丹波の教育の良さというのは、先ほど市長から、「鳥の目、虫の目、魚の目」という話がありましたので、ここに是非ですね、「獣の目」も加えていただいて、あと、もうひとつは水分かれの素晴らしいところは何度かお話させていただきましたが、今、「水」というのがキーワードになっています。令和の時代、天皇がそういった研究をされているといったこともありますし、これだけの大水害、そういったものがありまして、人間が生きる基盤を支えるのも水、崩すのも水というところで、そういった視点でも、非常にタイムリーな時代を先駆けしていく拠点になるかなと感じておりますので、先生方の負担をなくしていく、あるいは関係人口を増やしていくといった意味でもこういったことを是非活用できたらなというふうに感じているところです。以上です。

- 村上部長 ありがとうございます。それでは時間もありませんけれど、意見交換に移らせていただきたいと思います。コミュニティスクールのあり方ですか、関係人口の増加、市が開設している市民プラザとの関係とも受けました。ここからは自由な意見交換でよろしくお願ひしたいと思ひます。どなたからでも結構でございます。
- 谷口市長 一つだけよろしいか。今、横山委員から水分かれ公園のリニューアルについて話がありました。あのことの意味について、十分にわかっていただけない市民の方が多い、全体予算で3億円と言っている、3億円もあんなものにかけてという意見が大変多いんですよ。ただ、分かる方は「いいことをしてくれた」「中途半端なものにならないようにしっかりしてくれ」とこんなふうに言われる方もいる。

この前、東京に行ったときに、参議院議員の嘉田さんに会いました。元滋賀県知事をされていた方で嘉田由紀子さん、あの方がね、私が名刺を出したら、「ひょっとしてあそこですよ、水分かれがあるところですよ」とこう言われました。「あれはすごいです」と、「あれを真似して琵琶湖博物館ってありますよね、あれを作ったんです」こう言われました。この前、今お世話になっている三橋先生と話をすると、「嘉田さんと一緒に仕事していました」とそんな

話でした。丹波市ならでは、ここにしかない地域資源を語る場所は絶対あそこだと、あそこをおいて他にないと最初から思っていましたので、これは前からの辻市長の引継ではなくて、私から提案させていただいたと思っています。

それに対して市議会議員の中にもこれは是非ともという人がお会いもしてくれました。「氷上回廊保全条例」といったものまでこれから作っていかうというような話もしています。そういうことで是非とも、単なるアミューズメント施設ではなくて、エドゥケーターと呼ばれるような、きちっとした専門員、ここの素晴らしさを語れる人を是非ともここに配置をして、丹波市のイメージアップ、それこそ、外からリスペクトされるような、そんなまちにならないと移住者なんて来ないと思います。単にどんちゃん騒ぎでにぎやかにして人だけ呼ぶんじゃないで、あんなところに本当にリピーターとして行ってみたい。その先には移住したいという人を増やしていきたいなど、そんなことでございます。

- 横山委員 すみません、質問なんですが、先ほど、スクールサポートスタッフを配置されているというわけなんですが、どんな方が配置されていて、今後、各学校に配置を検討されているのか、そのあたりの具体的なことを教えていただけますか。
- 足立次長 次長兼学校教育課長の足立です。スクールサポートスタッフとして、東小学校に1名、教員のOBのような方が配置されています。県の予算の中で行われていることで、現在、県教委としては、丹波市には1名、県立学校には全て今年から導入されているんですけど、教員のOBの方が配置されている状況です。今後、この予算を要求させていただいているスクールサポートスタッフにつきましては、東小学校に配置しておりますスクールサポートスタッフのような業務を担っていただくような方を考えておるんですけども、人材確保については今後検討していきたいと思っていますのですが、なかなかすぐに任せられる方は見つけにくいということがありましたので、教員のOBの方などを募集しながら配置をできたらなと考えております。これも予算が通ったらの話になります。以上になります。
- 深田職務代理 すいません、今の業務の内容をもう少し説明していただけますか。
- 足立次長 業務につきましては、今、横山委員がおっしゃっていたように、事務処理が多いということですので、例えば、先生方が行っております宿題などを子どもたちが出しているかどうか点検したりするようなことがあるんですが、それが出ているかどうかチェックしたり、簡単な丸つけをしていただいたり、あるいは、子どもたちに渡す配付物をたくさん印刷したりするんですけど、それを各学級に配付するように仕分けをしたり、あるいは、宿題にプリントが

あったりする場合、印刷をしたり、そういったことを主にさせていただいている状況でございます。以上です。

○谷口市長 今、丹波市の総合計画の見直しをしています。その中で教育分野の一番目に書かれているのが、「生きる力を育む教育」に取り組もうという大きな目標があります。では、それを具体的に5年後にどんな姿を想定しているかというと、「ICTを活用した協同学習や主体的、対話的で深い学びを実現する授業を通じて、子どもたちが「学び続ける力」「新しい価値を創造する力」「社会で自立できる力」を身につけて自分たちの未来に向かって主体的に行動する人を育てています。」とこれだけいいことが書いてあるんですけども、この通り実現しようと思ったら、とてもではないですけど、先生方も大変ですし、子どももさらに新しいことを覚えなといけないわけですね。これを本当に5年後にこの姿を追求するとはっきりここに書いています、丹波市の目標として、こういうことってどうなのでしょう。教育長のご意見をお聞きしたいです。絵に描いた餅にならないようにできればいいんですけど。まあ理想系を書いているんですけどね。

○岸田教育長 今さっき冒頭に市長の話がありましたように、これからはもう世の中がどうなるか予測ができないとあらゆるところで言われていることが一つと、今まではどこかに正解があって、そのジグソーパズルみたいなものをびたっとはめ込む力があつたらよかったですけれど、今度はもう答えが無い、それぞれの知識をつなぎあわせてこうだろうと納得する答え、納得解を見つける力がいると言われてます。

それに向けて今、大学入試もごたごたしていますけれども、英語の4領域とか、記述式とかというものを導入しようとしているのもその一端です。ですから、今までは先生が丁寧に丁寧に教えてきた授業をしてきたんですけど、そうではなくて、自分たちが考える授業をしていかないと、たぶん、大半はAIがやってしまつて、AIが苦手とする読解力とか、物事を考え判断する力というのは身に着けておかないと、AIに飲まれてしまうと思います。そういう時代をやはり教育者、指導者側は見据えた教育を展開しないと、先ほど100年ほど前のことを教えているとおっしゃっていましたが、今まで教師は大学で教え方など習ってこなくて、自分が受けた授業を思い出して授業をやっている。それではもう立ち行かない時代になっているので、今、私どもが校長先生方にお話しているのは、そういう20年、30年先の社会がどうなっているかを見据えた上で教育転換をしていかないとだめですよということなので、今、夢物語のようなことだということですが、でも、ここを目指さないと丹波市の子はたぶん世の中でAIに使われる側に回っていくだろうと、AIを使いこなす側に回らないとだめではないかなという危機感を持って、今、学校にはお話をしています。

非常に難しいです。難しいですが、中学校を1回見に行っていたら分

かと思いますが、黒板とチョークという授業が随分減ってきました。グループで話し合いをさせたり、自由に討論させたり、あるいは、昨日、柏原中学で見せてもらった授業では、前へ出てプレゼンをしたり、そのプレゼンに対して他の生徒が評価をしたり、という授業パターンに変わりかけています。昨日も校長会と懇親会があったんですけども、学校が少しずつ変わっているなという手ごたえを私自身感じてましてですね、今後、楽しみにしているところがあります。以上です。

- 横山委員 今、市長から総合計画の中で、「生きる力」というお話があったんですが、生きる力を何と捉えているのかなというところ、言葉では簡単なんですが、今、その中で ICT を活用したという話があって、ICT は「道具」ですので、道具は上手に使うべきもので、ICT とかが今ちょっと枕詞のようになっていて、「ICT、IoT」という言葉を入れれば、それでなんとなく時代の先駆けという風な印象になってしまっていて、手段と目的ですね、単なる手段である ICT が、それを書いてしまえば、何か安心してしまうというところが今あるのが、逆にちょっと今怖いかなというふうに感じております。

本当に生きる力って何ですかというところだと思っただけですけど、私たちの分野の方では、今はお米と野菜が作れて、鹿と猪が獲れたら生きていけるんですね、これが生きる力の本質、食べ物をしっかり自分の力で得る、それから、食べ物が得られる自然を、水と土ですね、空気、こういったものをいかに守れるか、これが本質だと思うんですね。ところがそこに目を向けずに、バーチャルな世界ばかりを大人も子どもも追い求めると、恐らくどんどん生きる力が失われている、それが今現在ではないかなと思います。今、市長のご懸念、教育長のご懸念というのがありましたけれども、その言葉（ICT や IoT）で目標を持つのはとても重要なんですが、How to ですね、どうやってというところがほとんど抜けてしまっているというのをいろんな場面でちょっと危機感を持っておりますので、目標を書くというのはもちろん重要ですが、その How to、目標を考える以上に How to を考える、そういった場面っていうのが無いんですね。今、ICT と書いてしまえば終わってしまうっていうのを本当にたくさん見ていますので、是非ですね、How to をどうやってというところの議論というのをしっかりしていくというのが、そこを考えるだけでもだいぶ違ってくるのではないかなと感じておりますので、そういった観点を常に考えながら議論できたらなと考えております。

- 谷口市長 私はいつも、不思議だなとずっと思っているんですけど、養父市に青谿書院というのがありましてね、そこには江戸時代の終わりに池田草庵という方がいました。幕末ごろに多くの教育者が出ましたけれども、たぶん、但馬、丹波で一番偉かった人はその人だと思いますが、全国から 700 人ほどの人がそこへ学びに来ていました。その中からは東大総長が二人も出ましたし、大政治

家も出ました。あるいは、大銀行家も出ましたし、発明者も出ました。通訳になった人もいます。では、なんでそこからそんな多様な偉人が出てきたかということ、主体性を持たせた。自分で学んでいかないといけないということを池田草庵に教えられたおかげで、それぞれ自分の分野を探し出して自分で勝手に歩いていった。そういうことも非常に参考になるなと思うんです。その人のところでは、ある教えが大きな額で掛かっていますけど、「慎独」と書いてあります。

「慎む」という字と、「独り」、独身の独が書いてあります。一人であっても自分の身はきちんと決めて貫いていくということです。ですから、養父市に行くと小学校には、「慎独の日」というのがあって、毎週水曜日はゲームをしません、そういう日らしいです。

そういうふうに、信念を子どもたちが生み出す、そういう気概を持たせる、そういう教育だと思うんです。そういうことで、学力偏重とはいっても、やっぱり自分が興味を持って一生懸命学ばないとその世界は開けないと基本的には思います。でも、その教育が今できるかということとたぶん無理でしょうね。という疑問です。

- 岸田教育長 今、「生きる力」と出ましたけども、文科省が書いている定義があるにしても、いわゆる、自分で飯が食える、飯が食えるってどういうことかということ、自立できる、自分で考え、判断し、そして自分で答えを出して行動できる、この力を養う、その自立に至るまでに何が必要かということ、その課題に対してきちっと向き合って、対話などをして関わってコミュニケーションをとらないとだめということになるので、今言われた通り、主体的に学ぶという力、昔の寺子屋はまさにそれでした。寺子屋は一斉授業ではなくてそれぞれに興味あることを学べて、教えている人が尋ねられた子にだけ教えるというスタイル、それが途中から一斉に工業が発達するときに授業スタイルが変わってしまった、そういう学びに向かわざるを得ない。それから ICT についても、文房具論というのがものすごく出てきてですね、もう文房具でしょと、文房具みたいなものでしょと、コンピューターというのは、ところが、日本というのは外国に比べて2周も3周も遅れていまして、教育はもっと遅れています。ようやくこないだ、安倍（総理）さんが経済財政諮問会議で、「一人一台コンピューターを配りましょう」というような発言をした。経済産業省のほうも面白い発言をしました。まあどうなるかわかりませんよ、国も遅れていることに非常に危機感を持っている。たぶん、今度 LINE と Yahoo! が統合しますけど、もう、ああいう世代ですから、GAF A に向かっていくという、そうしないともう日本は勝てない、だから我々は、もう一度繰り返しますが、今の子どもたちにちゃんと飯を食える人間を作るとなれば、ICT をきちっと使いこなせる人間、あるいは英語がしゃべれる人間、人とコミュニケーションできる力、これを我々が作っていかなければ、大人が保証しなければいけない。それは教育だけではで

きないので、地域、保護者の力も借りる、いわゆる基本的な生活習慣のようなものは家庭でやってもらう、そこまで学校は抱えない、というようなことで、コミュニティスクールも進めていく必要があるということで始めたもので、まだ、始めたものばかりで、丹波市も一つ一つが形にはならないんですが、それをなんとかしないといけないということで、校長会、学校のトップの部分の意識を変えて一緒にやっていくということしかないので、絵に描いた餅にならないように最善を尽くしていきたいと思っておりますので、教育委員の方々の意見もいただきたいと思っております。

- 深田職務代理 教育長の話にある、子どもたちに多様な世界を見せるという、そういう話があったんですけれども、例えば今、小学生あたりでは「竜学」という事業で、北海道に行ったり、九州に行ったりしている。もちろん、切り口は恐竜という切り口なんですけれども、いろんな方々と交流できる。また、世界を広げることができる。また、ある学校ではオーストラリアへ5、6年生で行っている。また、中学でも外国へ行っている。これは一つの例ですけれども、そういう多様な世界をしっかりと見据えられる、単にコンピューターの中で、ネットの中で、Webの中で見る世界とは違って、自分の目で見て、そこに関わっている人々の思いを感じて、そして、やっぱりいろんな方々の世界の中で私たちは生きている、そんな感覚をなんとか身につけていけたらいいかなと思っております。

昨日もNHKで「しんかい6,500」という海底を潜る話がありまして、東大の3年生が最後に潜水艇に乗って、その子は、有人潜水艇なんかいらんやろと、無人潜水艇を流して綺麗な映像を撮ってそれで研究していけばいいではないかと言っていた子なんですけど、ただそれを進めながら、やっぱり有人潜水艇で自分の目で見て、その自分の目で見る感覚がみなさんに支えられて見ていたんだというそんな環境がやっぱり大事だと、無人と有人を平行して進めるべきだという結論を言っていました。そういういろんな世界を見せてあげて初めて気付くことがあるんじゃないかなと思っておりますし、行政のほうとしてもやはり小中学校にはそういういろんな世界を見せてやるのに支援をいただけたらというように思います。ただ、具体的に何をどうするというのはまだ浮かばないので、そんなことを思っているところであります。

- 村上部長 働き方改革以外のことも結構ですので、ご意見があればなと思っております。
- 出町委員 先ほどから多様な社会というか、せっかくのことを子どもたちに伝えていくというようなことがありましたけど、いただいている資料の中に関係人口と書かれている資料がありまして、その中に人口が減ったりだとか、大学との連携とかが書いてあるんですけれども、そういう中で先ほども関係人口を増やしていくことが重要だと話していた中で考えてですね、丹波市も大学が無

いながらもいろんな大学と連携協定を結んでいて、私が卒業した関西大学もそのうちのひとつにはなるんですけども、関西大学自体は学生数でいうと3万5,000人ぐらいです。卒業生を入れて50万人ぐらいの人が大学と関わっている、そういった、在學生であったり、卒業生なんかも日本各地で活躍している方々が多数いると聞いていまして、今、そういった人たちも丹波とかに関わるような仕組みを作れないかということで大学の中で仕組みづくりをしています。

そんな中で関西大学も様々な地域と連携協定を結んでいるんですけども、その連携協定の具体的な動き方っていろいろありまして、丹波市の場合は関西大学佐治スタジオを設けたり、空き家の再生とか、そういったものに取り組んでいますけれども、もうちょっと踏み込んで連携をしている行政、自治体というのもありまして、丹波市でいうと、もう少し踏み込んだことを大学に要求していてもいいんじゃないかなと常々思っています。それは教育現場におけることだけではなく、様々な分野であると思うんですけども、大学のそういった研究機関としてのいろんな資源がたくさんあるので、それをもっともっと踏み込んで大学側に要求していくと、丹波市もこんな課題があると、こんなことで困っている、もっともっとこういったところで連携とか協力してもらえることは無いだろうかというようなことを、連携協定の名の下に、提案というか、リクエストをしていくということがもっとあっていいのかなと思っています。

そういった関係人口がたくさん丹波市は増えてきているんですけども、ただ単にこう関係している人が増えるというのではなくて、そこから実際にアクションに動く、市が抱える課題にアクションしていくような関係作りですね、そういったところに踏み込んでいけたらというようなことを思う中で、大学連携でもっとうまく、利用するというか、貪欲にやっていてもいいんじゃないかなと思います。大学側が常々言うのは、大学は受身なので、大学側から「こんなことも出来る、あんなことも出来る」と地域側に簡単に働きかけることは苦手な部分があるので、言われると動きやすいといったところが大学側にもあると思うので、もっと声をかけて要望を出していくと、出せば出すほど大学側も応えようとしてくれるのではないかなと思いますので、その辺りがこれから関係人口のあり方としての考え方となってくるのではないかなというようなことを思いました。

- 谷口市長 出町委員からは大変よいアドバイスをいただいたと思っています。この中で武庫川女子大学の先日創立80周年を迎えられて、それこそ青垣町出身の公江喜市郎さんが校祖ということで、学校を創られて、その学校も結構丹波市のほうには興味を持っていただいております、4月には経営学部という新しい学部ができるし、何学部とは言われなかったけれども、植物に関係するようなそういう学部も先々検討していきたいというような話でしたので、も

う少し我々ももっとアプローチをしていって、学部がどーんと丹波市に出来るということは仮に無いにしても、実験農場とか何かランチみたいなもののでつながりができれば本当に、関係人口としても素晴らしいものができるなどちょっとそういうことも思います。そっちのほうもしっかりやっていきたいなと思います。

○村上部長 他にございませんでしょうか。

○中村委員 こうして話を聞いておりました、やはり人と人とのつながりだなというのをつくづく思っています。実際、私の子どもを見ておりましたら、本当にスマホばかり見ている、何か調べるといったらいつもスマホを見たりして、本当に人と人とのつながりというのが、一番大事なのにどうしたらいいのかなと思いつつ、話を聞かせていただきました。ありがとうございました。

○岸田教育長 働き方改革についても校長会で2回ほど話させていただきましたが、一番大きかったのが、福井県で新人の先生が自殺をされた案件ですね、校長先生の安全配慮義務違反というのが初めて裁判で認められて、6,500万円の損害賠償が請求された。今までは教育公務員特例法の中で、皆、主体的に残業しているという捉え方を学校はされていて、中々裁判は出なかったんですけど、それは残りたくて好きで残っているのではなくて、学校がさせた、という法責任をとられたこと、これをまず、校長先生にお話をさせていただいた。つまり、これからはもし、そういった悲しいことが起きた場合、学校長の責任が問われる時代になったということ、年間5,000人の病休者が出ている事実、やはり、先ほど中村委員のほうからありましたけれど、先生の笑顔が子どもの笑顔をつくるし、先生の元気が持続可能な学校を作ると考えますので、その笑顔が消えるようなことはだめということが一つと、前は「業務改善」といったんですけども、業務改善から最近「働き方改革」という言い方に変えてきたのは、働き方を改革するという事は、業務を精選して時間を減らすという「時間」にとらわれて議論するのではなくて、あくまでも、教育の質を保障する、教育の質の保障を邪魔するものはカットする、そういうために、先生がしっかりどこかに行って学ぶ時間が取れるとか、どこか先ほどのお寺のようなどころに行って学ぶとか、そういう働き方にならないと、子どもたちの学びを保障できないということで、最近、学校にお願いしているのは、時間を減らすとか、行事を精選するというような考え方ではなくて、これから新しい学びをしなければならぬのに、そういう時間がちゃんと取れていますか、取れてなければ、学級通信とかやめたらどうですか、あるいは夏休みの宿題をやめてはどうですか、いろんな見方をしましょう、学校のあたりまえを見直しをしましょうという話をしています、この間、ある調査結果を校長会でお話をしていたんですけど、学校からの配付物が多いと感じている保護者の割合が小学校では5割を

超えていた。そういう調査結果が出ていまして、やはり、これは良いことだと思っ
てやっていたことが、相手はありがた迷惑であったりすることがたくさんある
ので、第一の子どもを学ぶを疎外するものはやめましょと、そういう視
点で見直してくださいということで、あとは先ほど次長が言われたようにい
ろんな当たり前の見直しが始まったということで、思い切った改革をしよう
という学校が出てくると思います。たぶん、そういう学びを先生方と一緒に協
議を始める学校が増えていくと思いますので、そういう方向へ行ってもらえ
ればいかなと思っっています。以上です。

- 横山委員 非常に今、課題が多い状況で、子どもたちをどう育てていこうか
というところで大変な状況ではあるんですが、一方でその成果が非常に出て
いるなと思うこともたくさんありますので、そういったことをどんどん挙げ
ていくといったことも重要ではないかなというふうに思っっています。

先日、青垣中学校で文化祭がありまして、それに参加してきましたんですが、直
前に首里城の火災がありまして、学校の玄関に入ったら、私たちが訪れた首
里城のために募金をしますという募金箱が置かれていました。そこにです
ね、丹波布で作られた髪かざりや髪をくくるものとか、丹波布の草木染めの
勉強を3年生がしたばかりのようで、それをセットにして、200円とか500
円で、そういう値段なんですけど、自分たちが作ったものを提供して置い
てあるんですね、これで私たちがお世話になった首里城に恩返しをしたい
といった募金箱が3年生主体で置かれていて、これは本当に自分たちの
まちをPRすることと、首里城、それから修学旅行での思い、それを全部
合体させて自主的にやられていて、これはもう感動しました。そうい
ったことができる、まさに生きる力の一つだと思っしたので、恐らく先
生方が日々苦勞していろいろやられていることっというのは、子ども
たちにちゃんと伝わっている、そういう場面っというのを、いろいろな
場面で見させていますので、すごくプラスにっっている部分をどん
どん挙げてっってあげたらいいなというふうに思っっています。

- 村上部長 他にございませんでしょうか、概ね予定をしておいた時間が参
りましたので、副市長、何かありますでしょうか。
- 鬼頭副市長 今日のテーマが働き方改革っということで、「狭義」の働き
方改革と、「広義」の働き方改革があっって、「狭義」であれば、時間数、
超過勤務をいかに減らしていくかっという働き方改革の部分と、「広義」
の働き方改革っということになれば、単に超過勤務時間を減らすっ
ということではなくて、ワークライフバランスみたいなところとか、
現場のニーズによっていかに柔軟な働き方にするか、画一的な働
き方ではなくて、暮らし方、課題にっじてどれだけ柔軟に働けるか、
その場合、その柔軟に働きたいっというのを阻害しているものは何
かっということを考えて、その阻害しているものを取り除けば、柔
軟な働き方が

きるのかなど、一方で狭義の超過勤務を減らすというのは、教職員の方々だけでなく、まさに行政の重要な課題なんですけれども、論理的には割りと簡単な話で、超過勤務の元になっている仕事を減らすというのがひとつ、それからもうひとつは8時間勤務しているときの勤務の効率を上げる、その二つしかなくて、仕事を減らそうと思うと、全部仕事を棚卸しして、ひとつひとつ本当に必要な仕事かどうかということ、やめられるものはないか一個一個見ていくということと、民間にアウトソーシングしていく、教育でいえば、民間にアウトソーシングしていくということと、もうひとつは地域にアウトソーシングしていく、先ほどいろいろコミュニティスクールの話もありましたけれども、まさに地域にアウトソーシングしていく、あるいはその他に民間にアウトソーシングしていくものがどんなものがあるかというように、一個一個棚卸ししていくしかない。もう一個の効率化というのは、だらだらと仕事するのではなくて、きっちりと勤務時間に仕事の効率化を上げる、さっきのサポートスタッフというのも効率を上げていくためのひとつということでサポートスタッフをつけたり、その他に効率化を上げるために何があるか、問題は効率化を上げるというときにやっぱり一人一人の意識の問題みたいなことがあって、いかに時間を短くしていくかという意識をどれだけ強く持つか、効率化を上げてどれだけ持つか、これは我々行政職員も同じことなんですけれども、例えば、女性職員は基本的に残業が少ない、男性職員は残業が少ない、恐らく男性職員は家に帰ってごはんをつくらなくてはいけない。あるいは家に帰って子どもの面倒を見ないといけないというのが無いから、必ずしも勤務時間内にやりあげないといけないという意識が低い。一方で、女性職員は家に帰って子どもの面倒を見なければいけない。ごはんの用意をしないといけない。だから、17時15分になったら絶対に職場を出ないといけない。だから同じ仕事を持っていても、この8時間の中に必ずやりあげないといけないという集中力であったり、効率化を絶えず考えていたりということで非常に女性職員の仕事の仕方というのは効率的。だから男性職員は女性職員の仕事の仕方というのを学ばないといけない。もっと言えば、女性職員は子どもがいつ熱を出すか分からないから、いつでも休める体制をとっておかないといけない。男性職員はまず休まないといけないということはないから、そういう危機管理をしていない。女性職員は自分の仕事をもし休んだら、誰に頼めるか、自分の書類はどこに保管していて、休んだときに誰にちゃんと見られるような状況にしているかということ、普段から書類の整理をきっちりしていて、休んだときに誰でも見られるように、わかるようにしておく。男性職員の仕事は誰が見てもわからない。まあ、そういう普段からの危機管理の仕方が違うとか、そういうようなこともあって、効率的な仕事の仕方というのは何かということ、そういう意識を持っていかなければならないというふうなことかなと思っていまして、これは今の我々行政職員側の働き方改革の考え方ですけど、それが教職という現場の中で

どこまで通用するのか、必ずしも、行政職員の中でやれることが教育現場でできるとは思わないので、そういう中でどこまでいけるのかなというのもよく考えていかないといけないのかなというのを今日お聞きして感じたことでございます。

○村上部長 ありがとうございます。他にこれだけは言っておきたいということはありませんでしょうか。よろしいですか。それでは、予定をしておりました時間が参りました。意見交換を終了させていただきたいと思えます。

その他のところで何か事務連絡等がございませんでしょうか。こちらからもございません。それでは短時間で誠に申し訳ございませんでしたが、第二回の丹波市総合教育会議を終了させていただきたいと思えます。どうもありがとうございました。